様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ５ 月 ２４ 日現在

機関番号：３２６６３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ０２３１８

研究課題名（和文）18世紀における「真正のシェイクスピア」の創成とその本文編纂史への影響

研究課題名（英文）The Formation of "Authentic Shakespeare" and its Influence on Editing of Shakespeare's Works in the Eighteenth Century

研究代表者
五十嵐　博久（Igarashi, Hirohisa）

東洋大学・食環境科学部・教授

研究者番号：２０３００６３４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：シェイクスピアの正典化（canonization）が進み、神格化された詩人像への信仰（Bardolatory）が本文編纂に多大な影響を及ぼすようになった18世紀の時代における上演や批評、そしてその背景にある文化的風潮の特殊性についての調査を行った。また、シェイクスピアの正典化が起こる以前（すなわち初演から17世紀の時代）に彼の作品はロンドンの観客や読者にどのように受け止められ、どのような意義付けがなされていたのかを解明してゆく独自の方法論を模索してそれを確立した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
18世紀という時代は英文学という学問の創成期でもある。つまり、英文学という学問の発展はシェイクスピアがイギリスの国民的詩人として神格化され、礼賛を受けるようになった現象と無関係ではない。教育制度としての「英文学」がその役割を終えようとしている21世紀の現代において、過去においてシェイクスピア作品が正典化した所以について探究することは、学問としての英文学の意義とシェイクスピアの真価について問い直すきっかけを広く社会に示すことである。

研究成果の概要（英文）：There was a tendency for scholars and critics in the eighteenth century to value what they deemed to be the authorial intention to satisfy their own assumptions. Modern editions are not entirely free from their influences. Meanwhile,finding a way of resituating Shakespeare's drama in its original historical context is not easy. Historical critics and revisionists have been equally unsuccessful,since they based their reading on their fixed perceptions of history in manners similar to the way in which those in the eighteenth-century relied on their fixed imaginings of Shakespeare's authorial presence behind his works. A potential remedy to this may be sourced in the discipline of English law and literature, which locates Shakespeare's discourse in the context of the evolutionary process of English legal thinking before the eighteenth century. Adopting their practice, my research has now come to the stage of establishing a methodology of unwinding texts from eighteenth-century influences.

研究分野：英米文学

キーワード：シェイクスピア　テクスト　受容

１．研究開始当初の背景

18 世紀におけるシェイクスピア受容の問題にしばらく関心を抱いていた。2003 年にデイヴィッド・ニコル・スミス著『一八世紀のシェイクスピア』（大阪教育図書）を共訳して以来、このテーマについて調査研究を継続し、いくつかの論文を発表していた。2013 年には博士論文に基く著書 *Comic Madness, or Tragic Mystery, that is the Question*（英宝社）を出版し、18 世紀以降の受容史の中で構築されたシェイクスピア作品のイメージとそれ以前（つまり作品が初演された 17 世紀の時代）における作品のイメージが大きく乖離している可能性について関心を寄せていた。その後、ごく自然のことだが、18 世紀におこったシェイクスピアの正典化の過程で意識されるようになっていた「真正のシェイクスピア」という神話の形成とそれが当時の批評や本文編纂の方法に与えた影響にも関心を持つようになっていった。

同じ頃、国際学会においても 18 世紀のシェイクスピア批評を見直そうとする風潮が高まり、論文やモノグラフが相次いで出版されていた。技術革新も進み、18 世紀やそれ以前の資料がデータベース上で閲覧できるようになったことで、英語圏の研究者がその著書の中で触れている資料を参照し、ファクトチェックをすることも比較的容易に可能となりつつあった。

２．研究の目的

本研究の目的は、シェイクスピア研究の黎明期であり、その後のシェイクスピア研究及びシェイクスピア作品の受容の歴史に多大なる影響を与えた 18 世紀の時代において、それまであまり人々の関心の対象とはならなかった作者シェイクスピアのイメージが神格化され、そのイメージが編纂されたテクストに影を残していった歴史的過程に光をあてることである。

３．研究の方法

文献調査研究が中心であり、図書館資料やデータベース（Early English Books Online や Eighteenth Century Collections Online 等）を利用して文献分析を行う一方で、研究支援のための文献や研究論文を収集して精読した。2016 年 3 月、所属先大学では講義のない学生の春期休暇期間を利用し、ヴィクトリア大学（カナダ BC 州）図書館を利用して古い文献や雑誌記事、上記のデータベースを利用して情報収集をおこなった。また、本研究の中間報告を国内外の学会（英国シェイクスピア学会、国際シェイクスピア学会、日本シェイクスピア学会）及び研究会（関西シェイクスピア研究会、ヴィクトリア大学人文学部研究会）にて行い、シェイクスピアやルネッサンス文学を研究する国内外の専門家諸氏から助言や批判を受け、さらに世界中の研究者とのネットワーク形成に務めた。

2018 年度より所属先大学の図書館が Early English Books Online 及び Eighteenth Century Collections Online を導入したため、現在は研究室や自宅からもこのデータベースへのアクセスが可能となった。これによって 17 世紀及び 18 世紀の主要文献のテクストをすぐに検索できるようになった。また、研究室や自宅のパソコンを使って英国や北米の研究者とビデオチャットによる打ち合わせもできるようになり、文献の読み合わせや質問、また本研究とかかわる簡単な打ち合わせも楽にできるようになった。本研究は基本的には文献調査に基づく単独研究であるが、国内外の研究者との交流は非常に重要と考え、これを日頃から実行している。

４．研究成果

本研究期間を通じて力点を置いてきたことは、(1)シェイクスピアの正典化（canonization）が進みその影響が編集された作品のテクストに多大な影響を及ぼすようになった 18 世紀における上演や批評、文化的風潮の特殊性について調査すること、(2) 正典化が起こる以前（すなわち初演から 17 世紀の時代に）シェイクスピア作品が観客（又は読者）にどのように受け止められていたのかを説明する方法論を確立し、それに従ってテクストを解釈し 18 世紀以降の編集・校合・校訂によって見えにくくなっている部分を炙り出すこと、であった。

（1）シェイクスピアの正典化（canonization）と本文への影響についての考察

この調査については、2016 年夏にシェイクスピアの没後 400 年を記念して英国のストラットフォード・アポン・エイヴォンとロンドンで開催された国際シェイクスピア学会（The World Shakespeare Congress 2016）のセミナー（‘Shakespeare, Collaboration and Co-Creation’）に提出したペーパー ‘The Collaboration of Scholars and Critics since the Late-Eighteenth Century in Forming Hamlet’s Image’ に纏めて発表した。この論考では、シェイクスピアの悲劇『ハムレット』に登場するデンマーク王子の憂鬱（メランコリー）は、19 世紀から 20 世紀には主に精神医学の見地から解明できるかにみえる心理的現象として表象されてきたが、じつはその心理描写のリアリティーは 17 世紀に流布した旧版に由来するものではなく 18 世紀後期の校訂本に由来している可能性について論じた。また、18 世紀になされたテクストの編集・校合・校訂の根拠となっていたのは作者シェイクスピアの意匠という 17 世紀にはまったく推定されてなかった新たな考え方であった可能性が高いことを指摘した。18 世紀以降の本文校訂の典拠となっていた 17 世紀の版本は三つ（1603 年にクォート本の形で出版されたもの〔通称 Q1〕、1604／5 年に同じクォート本の形式で出版されたも

の〔通称 Q2〕、1623 年版の『シェイクスピア作品集』〔通称ファースト・フォリオ（F1）〕に収録された本文）存在し、現在では、この三つの異本は、それぞれ別の機会に上演された『ハムレット』の劇場用台本か、あるいはその台本の基となった草稿、または写本であったと推定されている。じつはハムレットの行動や言動の「謎」についてサイコロジカルな「解釈」を要求する言動は、必ずしもこの三つの旧版に由来するものではなく、18 世紀の本文校訂によって生じたものである可能性が高い。具体的には、この変化は 18 世紀後期に出版された校訂本において生じたものであり、18 世紀の前半までに出版された版本には認められない。（本文編集・校合・校訂においては、編者の考えや編集方針に従って旧版の本文を校合し折衷してゆくが、それによって生じた本文上の改変によって、登場人物の性格や心理状況には大きな変化が生じてくるのである。）

上記の変化が生じた時期には、文学の批評風潮や劇場における『ハムレット』の上演方法にも変化が生じていたことも指摘した。まず、批評風潮についてであるが、ロンドンの批評界を牽引していた大御所サミュエル・ジョンソン博士の引退とほぼ時期を同じくして、批評界はウィッグ党勢力の支持母体となっていたスコットランド哲学の影響が色濃く認められるようになっていた。デイヴィッド・ヒュームに影響を受けたグラズゴーの哲学教師ウィリアム・リチャードソンや（スコットランド啓蒙主義の影響を受けた）医学博士マーク・エイクンサイドらによる人物批評が批評家たちによって取り沙汰され、話題をよんだ。彼らの考えは、後に、モリス・モーガン、ウィリアム・ハズリット、サミュエル・テイラー・コウルリッジらがその先駆けとなったいわゆる「性格批評」（character criticism）を生んでゆくことになるが、その考えの基調となっている経験的因果からなる人間性形成の可能性を肯定するイデオロギーは、18 世紀後期までのイングランドでは、少なくともシェイクスピア批評においては抑圧される傾向がみられた。18 世紀後期以降の新しい批評傾向は、当時の人気俳優デイヴィッド・ギャリックのハムレットにも影響をもたらした。サミュエル・ジョンソンのもとでシェイクスピアを学んだギャリックのハムレットは、少なくとも 18 世紀中頃までは、発作的に彼を襲う爆発的情念（‘strokes of passions’）を声と演技によって表現するスタイルのものであったことを当時の上演記録が今に伝えているが、18 世紀後期になると、彼の演技は、ハムレットに発作的に起こる情念を観客が自身の身近な経験から理解できる感情（具体的には、親子の絆から生じる感情）として表現し、高評を得ている。

同じ頃、シェイクスピアの作品は文学（literature）の正典として読者層を広げていた。シェイクスピアを「読む」という営みが広く一般化してゆくプロセスにおいて、作者シェイクスピアへの興味関心が高まっていったことは言うまでもない。このことが 19 世紀以降の「シェイクスピア礼賛」（Bardolatory）と「作者の意図」（authorial intention）という幻想への妄信という新たな傾向を生んでゆくことになるが、すでに 18 世紀後期には、芝居の登場人物を「作者」（author）の手になるもの（creation）と捉える批評傾向が広く一般化していて、本文上の不可解点（literary cruxes）を校訂する手がかりとしてシェイクスピアの伝記的事実が過剰に意識されるようになっていた。この傾向は、18 世紀の最初のシェイクスピア全集であるニコラス・ロウ版の『シェイクスピア作品集』（1709 年刊）から継承されてきた傾向ではあるものの、18 世紀後半には伝記ブームが過熱し、全集に収録された作品がシェイクスピアの生きた生涯年表にしたがって並べ替えられるという事態にまで発展した。（この傾向は 21 世紀の今日まで継承されている。）

上述した論考では、18 世紀後期に生じた本文校訂というミクロな現象を、シェイクスピア批評を取り巻く文学界の批評風潮全体のコンテクストの中において考察した。セミナーに参加したメンバーは、マティアス・バウエル氏（チュービンゲン大学）、アンジェリカ・ザーカー氏（同大学）、ジョン D・コック氏（ホープ大学）、デイヴィッド・スコット・カスタン氏（イエール大学）、ウィル・シャープ氏（バーミンガム大学）、バート・ヴァン・エス氏（オクスフォード大学）、エマ・スミス氏（オクスフォード大学）他、私を含めて 6 名であった。このセミナーでのディスカッションを通じて上記の諸氏から好意的な評価を受けた一方で、助言や批判も受けたことは、この研究をさらに推し進めてゆく上で有難いことであった。また、このセミナーを通じて、シェイクスピアの本文研究や上演研究とかかわる未知の先行研究や欧米における最先端の研究動向について知見を広めることができた。

（2）初演から 17 世紀の時代にシェイクスピア作品がどのように受け止められていたのかを解明する方法論の確立

17 世紀にシェイクスピアの作品が観客にどのように受け止められていたのかを知ることは難しい。日頃、私達は、18 世紀以降に確立された本文に従い、また同じ時代に形成され、21 世紀の今日まで継承されている伝統的考えの枠組みの中で思考し、解釈し、作品と対話している。他方、上記の研究成果から明らかなことは、①17 世紀には編集、校合、校訂されたテクストは存在していなかったこと、②芝居の作者（author）の観客や読者によってそれほど強くは意識されず、ドラマの意味／意義は、テクストとそれが成立したコンテクストとの相互関係性において生じていたこと、というごく当たり前の事実でしかない。しかし、ここで困難なことは、17 世紀のコンテクストの可視化ができない以上、私達はコンテクストにおけるテクストの意味／意義を憶測によって推定することしかないことだ。1980 年代頃までの歴史主義やそれ以降の新歴史主義又は歴史修正主義（historical revisionism）の批評が、十

分に説得力をもって作品を解明しえないのはそのためである。以上のことから、本研究期間においては、ニュークリティシズム的なテクスト精読方法に立ち返っていくつかの作品を再読し再解釈すると同時に、広く 17 世紀研究全般の最近の批評傾向に目を向けながら、テクストを歴史的文脈に当てはめながら読む方法を模索し続けた。

しかし、18 世紀以降の編集・校合・校訂の影響下にあるシェイクスピア作品を読む場合、純粋にニュークリティシズム的なテクスト分析は困難である。作品についてすでに構築されている常識（それは「真正のシェイクスピア」への信仰が強かった 18 世紀から現代まで継承されている）をいったん解釈の枠外に置く方法で作品のテクストを読み、さらに 17 世紀のフォリオやクォートも丹念に比較しながら読んでいくしか道はない。この点において、日本というシェイクスピア研究の周縁地域において作品を読むことができるという経験はある意味で幸運であった。翻訳や日本における作品の翻案や受容史を通して作品を読むことで、シェイクスピアのテクストを紡いでいる英語ないしは英語圏文化の常識を離れて、それに向き合うことが可能であるからだ。しかし、日本の翻案や受容史を介した視点から作品を読みつつも、同時に英語圏の研究者との対話を通じてそれを行わなければならないことはいうまでもない。そこで、本研究期間には、特に悲劇や歴史劇のうちいくつかの作品について、国内外の研究者と対話をしながらグローカル（global かつ local）に精読してきた。その過程において発表した業績が、五十嵐博久「シェイクスピアを読むことを巡る反省的回想録」、公益財団法人日本のローマ字社編『ことばと文字 3 号』（くろしお出版、2015）、pp. 167−73、IGRASHI, Hirohisa, ‘ The “ Royal Play” of *Macbeth* Reconsidered ’『東洋大学人間科学総合研究所紀要』（第 19 号: 2017）、121-32、IGARASHI, Hirohisa, ‘The Impossibility of Turning Rancour to Love in Yukio Ninagawa’s *Romeo and Juliet*’, The British Shakespeare Association 2018、2018 である。

この探究を進めてゆく過程において、17 世紀の文学と法との融点に注目する欧米の新しい批評傾向に深く関心を持つようになった。絶対王政が確立されそれが弱体化して議会制民主主義の礎が築かれるまでの文学における法と権力の表象と、文献によって客観的事実として可視化できる法改正の記録を関連付けながら表象の意義を捉えなおそうとする、法学、歴史学、英文学といった伝統的専門領域を超えた学際的研究が欧米では進んでいる。この研究がシェイクスピアの作品解釈に新たな地平を切り拓きつつあるように見える。

例えば、『ベニスの商人』の裁判シーンにおいてポーシャが展開する論理について、それが、当時の裁判においてよく用いられたキケローやクインティリアヌスの弁術にならった loci commune（万人が共感する共有前提）に語りかける弁術法を模倣したものであるという指摘が最近ある思想史研究者によってなされている[註1]。この指摘は、読者がニュークリティシズム的な読みによって導かれるポーシャの言動に共鳴してゆく原理を歴史の視点から裏付けるものである。しかし、こうした指摘は、新歴史主義批評や伝統的な歴史主義に基づくシェイクスピア研究の範疇においてはなされえなかったものである。伝統的な研究では、ポーシャの判決は、ある時には衡平法による司法権を有した当時の大法官による修正判決と解釈され、またある時にはキリスト教の慈悲の考えが法に優先された裁判例と解釈されることはあったが、こうした解釈はいずれも法に対して神の代理人たる国王がその手中におさめていたという歴史観にとらわれたものである。ポーシャを社会を抑圧する権力の代弁者として捉えることは、ニュークリティシズム的な読みが読者を導くポーシャへの共感をうまく説明するものではない。この場合、17 世紀における法に関する思想史の側からこの裁判シーンを読み直すことで、はじめて腑に落ちるコンテクチュアルな読みが可能となるように思える。

同じことは、『ベニスの商人』の裁判シーンのみならず、シェイクスピアの作品に描かれるじつに多くの裁判シーンやそれに類似する場面、さらには登場人物一人一人が有する思考様式や行動規範についても当てはまるように見える。また、18 世紀以降の心理的解釈と本文校訂によって（無理矢理）辻褄合わせがなされてきたハムレットの「不可解」な言動もむしろ「自然」と見えるように思える。こうした新たな読み方は、本基盤研究の計画段階には想定されていなかったものであり、本研究の副次的研究成果（spin off）といえるが、上述した（1）の論考を補完してゆくテクストの一つの読み方としてより詳しい検証を必要とするという考えに至った。

この新たな考察の成果として、五十嵐博久「シェイクスピア劇における人物の行動規範と観客の共感の原理についての一考察」、熊谷次紘、松浦雄二編『シェイクスピアの作品研究—戯曲と詩、音楽』（英宝社、2016）、pp. 203−34 を発表し、次に、五十嵐博久「『ロミオとジュリエット』にみられる法廷的思考（forensic thinking）傾向について」『東洋大学人間科学総合研究所紀要』（第 20 号：2018）、75−96 を発表した。現在、ローナハットソンの編集した大著 *The Oxford Handbook of Law and Literature, 1500-1700* (OUP, 2017), pp.xxiii+801 の書評を執筆中であり、また、2019 年 10 月に鹿児島国際大学にて開催される第 58 回シェイクスピア学会において「シェイクスピアと法」と題するセミナーを主催する準備を進めている。

18 世紀以降のテスクト編集・校合・校訂によって見えにくくなっている部分を炙り出すことで、最終的には当時の「真正のシェイクスピア」神話の創成による本文への影響をより広

く調査して体系化することが本研究の最終目標である。

＜註釈＞

註 1. Quentin Skinner, 'Why Shylocke Loses his Case: Juducial Rhetoric in *The Merchant of Venice*', Lorna Hutson, ed, *The Oxford Handbook of Law and Literature, 1500-1700* (Oxford: Oxford UP, 2017), pp. 98-117.

５．主な発表論文等を

〔雑誌論文〕（計 4 件）

① 五十嵐博久.「『ロミオとジュリエット』にみられる法廷的思考（forensic thinking）傾向について」.『東洋大学人間科学総合研究所紀要』第 20 号. 2018 年. 75−96.〈http://id.nii.ac.jp/1060/00009760/〉

② IGRASHI, Hirohisa. 'The "Royal Play" of *Macbeth* Reconsidered'. 『東洋大学人間科学総合研究所紀要』第 19 号. 2017 年. 121-32.〈http://id.nii.ac.jp/1060/00008740/〉

③ 五十嵐博久.「シェイクスピア劇における人物の行動規範と観客の共感の原理についての一考察」. 熊谷次紘、松浦雄二編『シェイクスピアの作品研究―戯曲と詩、音楽』（英宝社）. 2016 年. 203−34 頁.

④ 五十嵐博久.「シェイクスピアを読むことを巡る反省的回想録」. 公益財団法人日本のローマ字社編『ことばと文字 3 号』（くろしお出版）. 2015 年. 167−73 頁.

〔学会発表〕（計 5 件）

① IGARASHI, Hirohisa. 'The Impossibility of Turning Rancour to Love in Yukio Ninagawa's *Romeo and Juliet*'. The British Shakespeare Association 2018. 2018 年.

② IGARASHI, Hirohisa. 'The Collaboration of Scholars and Critics since the Late-Eighteenth Century in Forming Hamlet's Image'. The World Shakespeare Congress 2016. 2016 年.

③ 五十嵐博久.「シェイクスピアの登場人物達の判断と行動原理についての一考察―『ロミオとジュリエット』における法と宗教の問題を出発点として」. 関西シェイクスピア研究会（2016 年 4 月例会）. 2016 年.

④ IGRARASHI, Hirohisa. 'The Royal Play of *Macbeth* Viewed from a Japanese Perspective'. Study Meeting for the Faculty of Humanities. 2016 年.

⑤ 五十嵐博久.「『ロミオとジュリエット』における宗教と裁判的思考」. 第 54 回シェイクスピア学会. 2015 年.

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等 なし

６．研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。